世代を超えつなぐ縁

子どもたちが祖父母世代と〝家事ゲーム〟

大垣市で子ども食堂を運営する市民団体「いるかのこそだて」は26日、「世代を超えて伝授～めざせお手伝い名人大会」と題したイベントを、同市新田町のホンダカーズ岐阜中央大垣新田店で開いた。毎月１回開く子ども食堂の一環で、特に地域の人や企業とのつながりを深めた運営を目指し、能登半島地震のボランティア活動を約１年間続けたことからの気付きを反映。祖父母世代に楽しく家事を教えてもらい、子どもたちに他世代に目を向けてもらおうと願いを込めた。（山田孝二）

Ｔシャツのたたみ方を教わる子どもたち＝大垣市新田町、ホンダカーズ岐阜中央大垣新田店

大垣の市民団体がイベント

能登ボランティアでの気付き反映

「子どもの笑顔を守りたい」。この思いで2021年から子ども食堂を運営している同団体の松好和子代表(50)。上の世代にも目線を広げたのは、同団体が続けている能登半島地震のボランティア活動がきっかけだった。

昨年2月、被災地に駆け付け、炊き出しボランティアを実施。その後も訪問を重ね、炊き出しのほか泥のかき出し、他団体と共同での出張子ども食堂の実施など活動の幅を広げ、気付けば2週間に1回ほどのペースで足を運び、1年がたとうとしている。

訪問先で接したのは、大変なはずなのに優しい声かけで他者を思いやる被災者や、ボランティアと一緒にできることは協力し合う被災者たち。自分たちも力をもらったように感じ、「支援している」から「支援させてもらっている」へと意識が変わったという。

松好さんは「災害支援も子育て支援も人の縁をつなぐこと。つながってこそ相手を思いやれる」と話す。

こうした思いから、昨年9月には地元の自治会、企業と連携した「縁ジョイ いるかのふるさとまつり」を開催。今回は地域の祖父母世代を思いやる心の大切さを伝えようと企画し、地元自治会に協力を依頼し、自治会関係者や市民生・児童委員らが参加。同店を運営するホンダカーズ東海（名古屋市）は、多目的ホールを無償提供し、活動を応援した。

参加したのは児童、園児ら29人、父母、スタッフの計47人。松好さんが営む「カフェ&キッチン ドルフィン」駐車場に集合し、近くにあるイベント会場まで歩く道中、70代のおじいさん世代が見守り隊となり、安全に交通誘導した。

会場では、洗濯物たたみ競争、雑巾がけ競争、おにぎり握りコンテストなどを実施。子どもたちは60～70代のおばあさん世代に教わりながら各競技に挑戦した。その間、母親らは昼食準備を手伝っており、最後は全員で「いただきます」をして食事を楽しんだ。

今後は昭和の遊びを通した交流などを構想しているという。松好さんは「子どもたちの笑顔を守るために子育て世帯と子どもたち、地域の人、地域の企業ともっとつながりたい」と話した。

イベント会場までの子どもたちの安全な移動を見守る男性＝同所

無断複製・転載を禁じます